

2022年10月30日 説教「ナアマンの信仰告白」

列王記第二章 15～19節

ツアラアト（重い皮膚病）にかかっていたナアマンは、エリシャが直接出てこないことに怒りましたが、言われるままに、ヨルダン川に入り、七回身を洗うと、病は癒され、きよめられました（レビ記 14 章）。預言者を通して命ぜられた簡単な主のご命令を、素直に行うことを通して、御業は現れたのでした。



1. ナアマンの信仰表明と贈り物（15節）

- ①エリシャの前に立ち（15）「そこで、彼はその一行の者を全部連れて神の人のところに引き返し、彼の前に来て、立って言った。」癒されたナアマンは喜びでいっぱいでした。浅はかにも、預言者エリシャの導きに対して、業を煮やし、帰ろうとしたナアマンでした。しかし、僕たちの意見を聞き入れて、川で体を洗ったからこそ、癒しをいただくことができたのです。彼は部下の者たちを引き連れて、エリシャのところに向かいました。ヨルダン川からギルガルへ引き返したものと思われまます。そして、エリシャに会うことができ、述べたのです。
- ②ナアマンの告白（15）『私は今、イスラエルのほか、世界のどこにも神はおられないことを知りました。』これはナアマンの信仰告白と言っても良いような内容です。つまり、彼は今ここで創造主なる神を信じると伝えているのです。「私は今、イスラエルのほか、世界のどこにも神はおられないことを知りました」。ローマ人への手紙 1:19、20 には「それゆえ、神について知れることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地がないのです」とありますが、ナアマンはいやされた時に主なる神に出会ったのです。はっきりと、主を神と認めたのです。
- ③贈り物の申し出（15）『それで、どうか今、あなたのしもべからの贈り物を受け取ってください。』ナアマンとしてはこの喜びを形にして表したいと思いました。もともと、彼は御礼のために、銀十タラント、金六千シェケル、晴れ着十着を携えてきていました。そこで、「あなたのしもべからの贈り物を受け取って下さい」とエリシャに伝えました。「あなたのしもべから」というほどに、へりくだってなした申し出でした。



エリシャ、ナアマンの贈り物を断る Wikipedia

2. 主は生きておられる（16～17節）

- ①受け取らない預言者（16）「神の人は言った。『私が仕えている主は生きておられる。私は決して受け取りません。』」しかし、エリシャはこれを受け取ろうとしませんでした。理由は、「主は生きておられ

る」と述べています。つまり、ナアマンは異教の習慣に従って、それらの贈り物を用意したのですから、受け入れる事は異教を受け入れた受け取られる事を案じたものと考えられます。エリシャは必要を満たしてくださる方は生きておられる主であり、彼は報酬のためになしたのではないことを明確にしたかったのです。とはいえ、人間的には大金に目がくらみそうになったことでしょう。

②ナアマンの説得も及ばず (16)「それでも、ナアマンは、受け取らせようとしきりに彼に勧めたが、彼は断った。」ナアマンは謝意を何とか表したいという思いを、懸命に訴えたのです。エリシャの働きのために用いていただきたいということも伝えたかもしれません。エリシャにしても、働きのための資金は必要でしたから、心が動かされる面もあったことでしょう。しかし、彼にとっては主への信仰が第一でした。

③土を求めるナアマン (17)「そこでナアマンは言った。『だめでしたら、どうか二頭の驃馬に載せるだけの土をしもべに与えてください。しもべはこれからはもう、ほかの神々に全焼のいけにえや、その他のいけにえをささげず、ただ主にのみささげますから』」さすがのナアマンも、これ以上頼んでも無駄だと思ったのか、別のお願いをします。それは、彼の信仰表明の適用でした。つまり、二頭の驃馬に載せられるだけの土を持ち帰ることを許してください、という願いでした。その理由は、国に帰ってから、彼は主なる神の祭壇を築きたいと考えたのです。これまでは、ほかの神々のために全焼のいけにえや、ほかのいけにえを捧げてきたナアマンです。しかし、帰国してからは、イスラエルの神、創造主にいけにえをささげるための祭壇を築く材料として、イスラエルの地の土が良いと判断したのです。土に意味があるのではなく、新たなる志の表現でした。

3. リモンの神殿に立った時のこと (13~14 節)

①し (18)「主が次のことをしもべにお許しくくださいますように。私の主君がリモンの神殿に入って、そこで拝む場合、私の腕によりかかります。」リモンとは嵐と雷の神で、アラムの国のダマスコに祭られていました。創造主への信仰をもったナアマンですが、気になることがありました。

国に帰れば、どうしてもリモンの神殿で王がその神に礼拝をする時に、どうしても將軍ナアマンはその介助をしなければならなかったのです。つまり、王は拝む時に、ナアマンの腕を頼りにしてきたのです。

②リモンの神殿 (18)「それで私もリモンの神殿で身をかがめます。私がリモンの神殿で身をかがめるとき、どうか、主がこのことをしもべにお許しくくださいますように。」王が神殿で身をかがめる時には、その介助のためには、どうしても一緒に身をかがめなければなりま

せん。かたちとしては、リモンの神に礼拝をするような姿勢になってしまうのです。どうか、このことについては、ご理解くださるようお願いしますと、ナアマンはエリシャにとりなしを求めたのです。

③安心して行け (19)「エリシャは彼に言った。『安心して行きなさい。』そこでナアマンは彼から離れて、かなりの道のりを進んで行った。」エリシャは言いました。「安心していきなさい」。この言葉をどのようにとるかではありますが、それは結論の部分で考えることにしましょう。ナアマンはエリシャの許を離れて、アラムの国への道を、部下たちとともに、進んでいきました。贈り物も持ち帰ることになり、土が加わりましたから、二頭の驃馬には大きな負担の旅となったことでしょう。

《結論》ナアマン將軍は重い皮膚病から癒されました。それにより、人生観や

信仰が百八十度変えられました。それまではアラムの国のリモンの神に心を

寄せていました。しかし、癒しはナアマンの身体だけでなかったのです。魂まできよめられて、新しくされたのです。そして、「私は今、イスラエルのほか、世界のどこにも神はおられないことを知りました。」という信仰告白に表れているように、唯一のまことの神に出会ったのです。

これは当たり前のことではありません。これまでの歩み、家族、国の人々の

信仰などや様々なしがらみを考えれば、イスラエルの神を信じていくことには、相当にリスクのあるのです。しかし、彼はまことの神を信じないではいられなかったのです。15 節の釈義にも記されているローマ 1 章の御言葉は、どの国の民にも、まことの神はご自分をあらわされていることが記されています。ナアマンはその主と直接に出会ったのです。彼はイスラエルの民からすれば外国人でしたが、創造主を知ったのです。モアブの地で生まれたルツも、「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」(ルツ記 1:16) と告白しましたが、神はあらゆる国の、すべての民に呼びかけてくださっていたのです。現代のこの国に生きる民にも、まことの神を知らされています。キリストの福音を知らせていきましょう。そのことで、人々はぼんやりとしていた創造主をはっきりと知るころになります。福音はその人にはまさにグッドニュースになるのです。

ところで、ナアマンの信仰は思い付きや、一過性のものではないことが、こ

の記事にはあらわされています。一つは、持ち帰る土で新たなる信仰の祭壇を作るという構想のなかにあります。もう一つは、彼が国に帰った時に必ずやってくる、信仰の問題をエリシャに相談していること

に表されています。アラム王がリモン神殿で礼拝行為をする時に、ナアマンは介助しなければならない立場で、形の上では一緒にリモンを拝してしまうことになる。そこまで、ナアマン

は考えていたのです。信仰に入ったばかりでしたが、それとどのように対峙

したら良いかとまで思いめぐらしていたのです。これに対して、エリシヤは「安

心して行きなさい」と言っていますが、これをどのように理解したら良いでしょ

う。エリシヤは偶像礼拝を容認しているのでしょうか。十戒には「あなたには、

わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは自分のために偶

像を造ってならない。・・・それらを拝んではならない」(出エジプト20:3~5)

とあります。預言者と言え、それを真っすぐに伝える人でありましよう。

もちろん、エリシヤは偶像礼拝を容認したのではありません。ここでエリシヤ

はナアマンの信仰をはっきりと認めたのです。今で言えば、洗礼を受けること

を許可したのです。彼は信仰を持ったばかりですが、その信仰は明確でした。

これからのナアマンの信仰生活ついて、霊的な成長が、様々な壁を越えてい

けることを信じ、エリシヤは主に委ねて+、祈っていくことにしたのです。

私達の信仰生活においても、異教の神々の信仰に対峙させられることがあります。まずは、信ずる神をしっかりと見上げましょう。キリストの福音を確認しましょう。そして、真の神のみを礼拝する道をいただけるように、祈っていきましょう。主がそうした場面に、兄弟と共にいてくださいますように。